

ボランティア行為者の他者に対する関係性はどのように形成されるのか？ ——終末期の医療に関わるボランティア行為者の関係性創出プロセスに着目して——

九州看護福祉大学大学院 竹中健

【目的】

医療福祉分野へのボランティア活力の導入は、北米を後追いつける形で日本でも部分的に試行されている。しかしボランティア組織が先進的に展開している欧米諸国の事例と比較すると、必ずしも日本においては順調な広がりを見せてはいない。本報告では、ホスピスなど終末期の医療におけるボランティア活力導入の可能性を議論する。日本においても一部展開するいっぽう、カナダ・スコットランド・ドイツのそれと比較すると量的にも質的にも違いがある。さらに組織や活動が展開していく上でも未だに多くの課題がある。各国のボランティア組織や行為者の比較より、日本におけるボランティア活動展開のための知見を発掘するのが目的である。

【方法】

本報告では、日加英独におけるボランティア行為者の支援対象者に向けて形成される関係性の違いに注目する。ボランティア行為者が他者との関係をどのように取り結んでいるのかを、非構造化面接により聞き取った行為者の語りから知ることを試みる。行為を始めた動機、継続する理由、行為への意味付与プロセスを追う。

【結果】

終末期医療にかかわるボランティア行為者の諸相は、各国さまざまである。しかしそこにはある一定のパターンが存在しているようにも見える。それぞれの事例は、なぜかどれも「他者と関わらずにはいられない」というハビトウスが、各々の行為者を強く突き動かしている。そのハビトウスは行為の継続に伴って、時間的・空間的な広がりをみせながら他者を巻き込み、組織や社会全体へ確実に影響力を及ぼしていく事例が存在している。終末期を迎える人にとって、傍らに存在する人の意義はおおきい。直接的な看護や介護、サポートの仕組みと同じように、精神的な安堵が得られる環境は重要である。病床にある人や死にゆく人の非制度的かつ非職業的なサポートにはさまざまな形態がある。それが仮に一部の行為者によるものであったとしても、その行為が一定程度反復され、普遍的な営みとして定着し、広がりをもって展開する可能性がある。その可能性を広げる知見を提示していくことは重要である。終末期の人に寄り添うボランティア行為の社会的意義とその展開可能性を論じる。

【結論】

死にゆく人に寄り添おうとする人のライフ・ストーリーは、さまざまである。しかしその類型は、国や文化、宗教、医療や社会福祉制度のありかたとは必ずしも直接リンクしているようには見えない。行為者には各国に共通した他者との関係性創出のパターンとバリエーションが存在している可能性がある。